



後鳥羽院御記 卷首圖

着留襪様

具是とゆとらんを便直に用ふる所あり内より會
ありといへく玉骨ありて庭にても因玉のこころむ
もててふまふく一傳結句一わりくあるやいそれ
及てくわらも半はる縁なきるやいつめよりそ
うしうむいふ所より縁なきるやいつめよりそ
及てていふ所より人いみより一説とたのみく尾籠
のの出来ことほりいふく卦敷を一着留襪次
才先右の着留襪の縁昔よりわら結法あり

後鳥羽院御記

三十一

と昔のころはあつたが、
 とくは海をこし、
 是れは種のこと、
 後よりなす。



弦緒を鞠れうくおまめにいりては、
 弦事、
 鞠をけはりゆく魚支也

我胡也

後白河太上皇專雖興隆我道而未定之式方
今賢名不及和漢之二君愚意只守思舟之一
言深技餘風好而有日然間業受于家名顯于
國之輩推獻高稱之表誤得長老之号今定
裁獲之也之示跪鞠之人之永守法式勿違祀

矣

元元五年田正月 日

右後鳥羽院淨化以常徳院教芳翰書寫而卷首殘缺失其題名矣

羣書類從卷第三百五十三

